

【研究ノート】

評価成分「～もので」をめぐる

津留崎 由紀子

“~Monode”, a Modal Phrase to Show Evaluation on Following Close

TSURUSAKI, Yukiko

要旨：本稿では、先行研究において明らかにされた「～ものだ」の特徴を検証し、評価成分とされてきた「～もので」を、中止形の表す関係の意味という観点からとらえ直した。評価成分「～もので」の特徴は、意味的には評価成分「～もので」の評価が一般的な評価であることを示し、文法的には述語性をもつ、という点にある。また、評価成分とされる「～もので」の中に、後続節に対して 注釈 と 評価 という異なる関係の意味を表すものが存在することを示し、その区別を明確にした。さらに、評価 を表す述語名詞の中止形には、総称名詞に関する一般的な知識に基づいた評価を表すという一類型があり、評価成分の「～もので」がその中で重要な位置を占めることを確認した。

キーワード：「～もので」 評価成分 中止形 一般性 注釈 と 評価

1. はじめに

評価成分とは、「文の叙述内容に対する話し手の評価を表す、先行する独立的成分」(工藤(1997))である。評価成分の主な形式は、「珍しく」のような 形容詞の連用形、および「残念にも」のような 形容詞の連用形 + モ の形のほか、現代では 形容詞 + ことに が代表的なものである。「～もので」にも以下のような評価成分の用法がある。

(1) 不思議なもので、忙しい時に限って遊びに誘われる。

「～もので」とほかの評価成分との違いについては従来あまり問題にされることがなかったが、西川（2007）は、評価成分の「～もので」にほかの評価成分にはない特徴を見出している。西川（2007）によって明らかにされた「～もので」の特徴をふまえ、本稿では、「～ものだ」の中止形という観点から、評価成分の「～もので」を中止形の後続節に対して表す関係の意味の分類の中に位置づけたい。

2．評価成分とは

2.1 評価成分の構文的性格

評価成分は、叙述内容を修飾、限定する情態副詞とは異なり、命題や出来事、人の行為に対して話し手の立場で評価する文の成分の一種である。具体的には、以下の下線部のようなものを言う。

（2）あいにく / さいわい、雨が降りだした。

（3）惜しくも / 幸運にも、わずか一点差で負けた。

下線部は、後に続く部分の叙述内容について話し手の評価を表すだけで、叙述内容には関わらない。（2）と（3）は、話し手が起こった出来事を不都合と考えるか好都合と考えるかで、同じ叙述内容に異なった評価が加えられており、評価を変えても述べられた出来事自体は変わらない。文の叙述内容に関わる副詞というのは以下のようなものである。

（4）しとしとと / ざあざあと雨が降りだした。

「しとしと」や「ざあざあ」は雨の降り方を詳しくしているため、どちらを用いるかによって出来事自体が変わってしまう。

また、評価成分は叙述内容に対する評価を表すことから、後続する節を主語にした文や、後続する節を先行させた文に言い換えられる。

（2）' 雨が降り出したのは、あいにく / さいわいだった。

（2）" 雨が降り出して、あいにく / さいわいだった。

（3）' わずか一点差で負けたのは、惜しかった / 幸運だった。

(3) ”わずかに一点差で負けて、惜しかった／幸運だった。

これに対し、(4)の「しとしと」や「ざあざあ」は雨の降り方だけに關わるので、上のような言い換えはできない。

(4)' *雨が降り出したのは、しとしとだ／ざあざあだ。

(4) ” *雨が降り出して、しとしとだ／ざあざあだ。

叙述内容全体に対する評価といっても、人が関わっているときは、その人の行為に対する評価を表すものもある。下の「大胆にも」は犯人の行為に対する評価である。

(5) 犯人は大胆にも警察に挑発の電話をかけてきた。

評価成分に後続し、評価の対象となる叙述内容は、上のような動詞文のみでなく、形容詞文、名詞述語文も可能であり、述語の種類を選ばない。

(6) 幸い、母はやさしかった。

(7) 幸い、彼の父は医者である。

また、評価というのは確定したコトガラに対するものなので、評価成分は、はたらきかける文や意志を表す文のような、未実現の事態を表す文には現れない。

(8) *幸い、大学に合格しよう。

2.2 評価成分の諸形式

工藤(1997)が整理した、評価成分の 代表的な型 と 代表的な諸例 には、以下のようなものがある。

A 「も」不要：あいにく(と)幸い(に、にも、にして)不幸にして(にも)

運よく／悪く、幸運／不運にも、珍しく、不思議に

かわいそうに、気の毒に、感心に、生意気に

B 「も」形式

ほぼ評価専用：残念にも、惜しくも、心外にも、卑怯にも

奇しくも、いみじくも、はからずもなどは形が固定的

評価は「も」、修飾は「も」となるもの

：悲しくも、なつかしくも、愉快にも、意外にも

大胆にも、親切にも、けなげにも、頑固にも

C「～ことに」形式：うれしいことに、困ったことに、不思議なことに

D「～もので」形式：変なもので、妙なもので、正直なもので

E「～ながら」形式：遺憾ながら、失礼ながら、はばかりながら

F前置き節や挿入句など：恥ずかしい話ですが、事もあるうに

工藤（1997）はAとBが代表的な評価成分で、品詞としても「評価副詞」としてもいいと述べている。C「～ことに」は、形容詞だけではなく動詞からも作られ、「惜しくも」などの形が文語体に限られるのに対し、「現代語の批評¹⁾」は～『事に』の形でなされる傾向が強い」（渡辺（1971））と言われ、現代ももっとも「生産性のある」（工藤（1997））形式とされる。工藤（2004）ではA～Cを代表的評価成分としている。

「～もので」については、（述語名詞の）連用形が評価成分になる形式として渡辺（1949、1971）、川端（1958）などでも触れてはいるが、「～もので」だけを取り上げた論考は、西川（2007）までなかったと言ってよい。

3．評価成分「～もので」の特徴

西川（2007）の主張をまとめると、以下のようになる。

「～もので」は節構造をとり、後続の節に並列の関係で接続する。

「～もので」の評価対象は、後続節の叙述内容ではなく、「～もので」の主語にあたるものごとである。後続節の叙述内容は「～もので」の根拠に当たる。

後続節の叙述内容を根拠とする評価が、話者の個別な評価ではなく、一般的な評価であることを示す構文である。

以下ではまず と について、次に について検討する。

3.1 「～もので」と重文構造

西川（2007）は、「～もので」は、主語が顕在しない場合でも常に重文構造²⁾をとっており、「PはXものでQ」という構文のPが省略された形だとし、以下のような論を展開している。

西川（2007）では、「～もので」の主語の有無によって「PはXものでQ」構文と「Xもので」構文に分け、Pがある「PはXものでQ」構文をさらにPが総称名詞の場合と特定の名詞の場合に分けている。Pが総称名詞の場合、Xが「妙だ」の例が多く、Pが特定の名詞の場合は、Xにその性質を表す評価形容詞がきているとして、以下のような例をあげている。（9）が総称名詞、（10）が特定の名詞の例である。

（9）立つと云い出すと、人情とは妙なもので、父も母も反対した。（『こころ』, 115）（西川（2007）の（8）（以下、西川（8）のように略す））

（10）併し、坊様はのん気なもので、一人が胸中酔墨と言え、一人は酔後筆端などと言っている。（『モオツアルト・無情（西川（2007）のママ）ということ』, 325）（西川（10））

また、Pが顕在しない「Xもので」構文でPが復元可能な場合も、復元可能なPが総称名詞の場合と特定の名詞の場合に分けている。

復元可能なPが特定の名詞の場合については、例をあげてPが何に当たるかについて述べている。以下の例では「当時（の状況）」であるという。

（11）のんびりしたもので、彼ら将校の中には、廓で芸者をあげて豪遊する者もいたそうだ。（『風に吹かれて』, 307）（西川（13））

総称的な名詞の場合、文脈独立的に復元可能なPは全て「人間（というもの）」「世の中（というもの）」になる、として、下のような例をあげている。

（12）おかしいもので、からだが弱っている子どもには、だれもきびしいことは言わないものだが、ぴんぴんしているほうには、どうしても風あたりが強かった。（『路傍の石』, 194）（西川（16））

（13）「どうも不可（いかなえ）もので、親の悪いところばかり子に

伝わる。」(『破戒』, 305)(西川(17))

以上から、「Xもので」は、常に「(Pは)Xもので」という、主語の存在する節構造である、としている。

さらに、西川(2007)は、「(Pは)XものでQ」という構文において、「(Pは)Xもので」と「Q」が(主従関係ではなく)並列関係にあると述べる。その根拠として次の例をあげ、(14)のような理由を表す従属節ではなく、(15)のような並列関係にあり、重文構造をとっている、とする。

(14) その男の性癖は困ったもので、ぼくには対応しかねる。

(15) その男の性癖は困ったもので、壁があると落書をし始める。

筆者も、西川(2007)と同じく「～もので」に潜在的な主語の存在を認める立場に立ち、「XものでQ」構文が(14)の主従関係でないことは認めるが、(15)は並列関係ではないと考える。これについては4で改めて述べる。

3.2 「～もので」の評価の一般性について

3.2.1 西川の論

西川(2007)は、評価表現の「Xもので」構文は、「Xもので」で表される評価が話者の個別的な評価ではなく、一般的な評価であることを示す構文であると述べる。また、「Xもので」と「Xことに」のどちらでも表せる場合の意味的な違いについて、その違いを「ものだ」と「ことだ」の違いに還元される³⁾とし、次の例文をあげている。

(16) 不思議なことに昨日はよく眠れた。(西川(33))

(17) ? 不思議なもので昨日はよく眠れた。(西川(34))

(16)がよくて(17)が不可なのは、後続節の叙述内容が、「人というものは不思議だ」という一般的な評価がなされる根拠として認めがたいからだが、次のようにすると一般的な評価をする根拠になり、容認できるようになるという。

(18) 不思議なもので、頭をアイスノンで冷やすと昨日はよく眠れた。

(西川(35))

筆者も評価成分の「～もので」の特徴を、一般的な評価を示すことにあると考える。以下の例からも説明できる⁴⁾。

(19) 悲しいことに、かわいがっていたポチがいなくなってしまった。

(20) ? 悲しいもので、かわいがっていたポチがいなくなってしまった。

(21) 悲しいことに、若いときにはなんでもなかった階段で息切れするようになった。

(22) 悲しいもので、若いときには何でもなかった階段で、息切れするようになった。

(19)は、語り手が後続節の個人的体験を、「悲しいこと」と評価して先に述べたものであるが、(19)の「ことに」を「もので」に換えた(20)は不自然である。ところが、同じように個人的な体験を述べた(21)の「ことに」は、「もので」に換えても問題ない。これは、やはり(19)と(21)の後続節の叙述内容が異なっていることによる。(19)が一回限りの個別的出来事であるのに対し、(21)は、人がよく体験する、または体験することが容易に想像できることである。また、それを「悲しい」と思うのもだれにも理解できることであろう。ここから、個人的体験に対する個別的评价は「～ことに」のみが可能だが、人が一般的に体験すると容易に想像できることに対しては、「～もので」の評価が可能になる。(21)(22)はどちらも可能だが、(22)には一般的に共通な評価だという意味が出る。(22)は「悲しいもので」の主語として、「人間(というもの)は」が復元可能である。

3.2.2 「もので」の前にくる語句

「～もので」が一般的な評価を表すことは、「もので」の前にくる語句の特徴にも現れている。西川(2007)も「Xことに」と「Xもので」のXとなる評価形容詞の例をあげ、「もので」には偏りがあると述べている。

用例に見られる「もので」「ことに」の前にくる語句を意味的に分類すると以下ようになる⁵⁾。語例は、筆者が収集した用例⁶⁾の語句である。「もので」の前にくる語句の意味は、後続節の叙述内容に対する評価を表すものの(A)と、人や人の行為に対する評価を表すもの(B)に分けられる。Aは、さらに4つに分けることができる。

A. 叙述内容に対する評価を表すもの

A.a 叙述内容の禍福評価

叙述内容がいいことか、よくないことか、デキゴトが起きてよかったか、よくなかったかを、語り手が評価する語句である。

もので：間の悪い

ことに：幸いな、悪い、不幸な、まずい、運の悪い、仕合せな、不運な、具合の悪い、始末の悪い、いけない

A.b 叙述内容に対する感情による評価

叙述内容に対し、感情で評価するものである。感情は主に快・不快の評価となる。

もので：困った、恐ろしい

ことに：驚いた、困った、ありがたい、残念な、おもしろい、惜しい、辛い、かたじけない、腹立たしい、情けない、あきれた

A.c 叙述内容と語り手の知識や常識との不一致を表すもの

叙述内容に対し、語り手が個人的または一般的な知識や常識とは異なり不可解だと感じたことを表す語句である。

もので：不思議だ、おかしい、妙な、変な、案外な

ことに：不思議な、おかしい(な)、妙な、奇妙な、不可解な、珍しい、滅多にない、信じがたい、意外な、滅多にない、

A.d 叙述内容に対する分析的評価

単純な善・悪や快・不快ではなく、叙述内容を分析した上で語り手が評価判断する語句である。

もので：よくした、争われない、いかねえ、早い

ことに：こっけいな、ばかげた、皮肉な、因果な、無残な、驚くべき、言うもけがらわしい

B. 人や人の行為に対する評価

叙述内容全体ではなく、人の行為や人そのものに対する評価を表す語句である。「のんきな人」「のんきな行為」のように、人と人の行為の両方について述べる形容詞や動詞になる。

もので：のんびりした、ひどい、現金な

ことに：気の毒な、感心な、横暴な、無礼な、うかつな

上からわかるのは、「ことに」の前にはさまざまな語句がくるが、「もので」の前にくる語句はバリエーションが少ないこと、語り手の知識や常識との不一致を表す語句は「もので」と「ことに」の両方の前に現れるものが多いこと、「ことに」の前には禍福評価の語句や感情を表す語句が多いのに対し「もので」の前には少ないことなどである。

「～もので」の前にくる語句について、西川（2007）は、『惜しい、残念だ、幸いだ、幸運だ、不幸だ、不運だ』などの評価形容詞は、（略）『人間』や『世の中』という、文脈独立的にPが復元可能な総称名詞を評価対象としてとれないため、（略）『Xもので』構文をとることはできない。」と述べている。これらの語は、A.aの禍福評価、A.bの感情による評価の語句に当たる。A.a禍福評価、A.b感情による評価の語句は、「人間（というの）は幸せだ／不幸だ／幸運だ」「人間（というの）は惜しい／残念だ／悔しい」などとは言えないため、「もので」の前にくる例が少なくなる。一方、「人間／世の中というものは、不可解ではかりがたい」ということはよくあるため、語り手の知識や一般的な常識との不一致を表す語句が「もので」に多かったといえることができる。

ただし、感情の中でも「悲しい／恐ろしい／おもしろい／おかしい／困った」などは、「人間（というの）は悲しい／恐ろしい／おもしろい／困ったものだ。」「世の中（というの）は恐ろしい／おもしろいものだ。」などと

もいえるため、「もので」の前に現れうる。また、「人間というのは運の悪いことが多い」という意味で、「運の悪いもので」なども現れうる。以下のような例がある。

(23) 民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつある其横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。(略) しなやかに光沢のある鬢の毛につつまれた耳たば、豊かな頬の白く鮮かな、顎のくくしめの愛らしさ、顎のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の襷や、それらが悉く優美に眼にとまった。そうなんと恐ろしいもので、物を云うにも思い切った言は云えなくなる、羞かしくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることであろう。(野菊)

(24) [昔は]紙袋にくるんだ鳥の一羽やそこら、どこにでもほうり込めたのだが、今はポリバケツしか捨て場所はないらしい。ところが、間の悪いもので、今度の通りで捨てようと思って近づき、蓋に手をかけようとする、すぐ前のアパートの窓があいて、歯を磨いている男の顔がのぞいたり、頭にクリップをくっつけたムーム姿の女がサンダルを引きずりながら出て来て、ゴミを捨て、頭の地肌を掻きながら九鬼本をじろりと見てもどっていったりする。(思い出)

(23)は「恐ろしい」の例である。ただし、一時的な感情としての「恐ろしい」から、意味が少しずれている。(24)はタイミングの悪いことは誰にでもあるという一般的な認識を基にしていると考えられる。ただし、これは、A.dの分析的評価に分類される例とも考えられる。

また、分析的な評価の語句の中に、「よくしたもので」という例が複数ある。これも「人生(世の中のしくみ)」というのはよくできているものだ」と感じることは一般的によくあることから、固定化した表現になったものと考えられる。「した」に意志的動作の意味はなくなっている。

(25) それらの病気がもし後遺症を残していたら、とてもここまで生

命を長らえることはできませんでした。よくしたもので、試練はひとつひとつやって来ては去っていき、あとには何も残りませんでした。(哀歌)

3.2.3 「ものだ」文の特徴

評価成分「～もので」の特徴には、述語形式「ものだ」が文末にくる文(以下、「ものだ」文⁷⁾とする)の特徴が引き継がれていると考える。「ものだ」文は、通常以下の5つに分類される⁷⁾。

習慣は、国によって違うものだ。(本性・傾向)

売られたけんかは、買うものだ。(当為)

このデモは、政府のやり方に異議を唱えるものだ。(解説)

小さいころは、この辺りを走り回って遊んだものだ。(回想)

ばかなやつがいたものだ。(感慨)

それぞれの用法は、一定の条件で他の用法と区別されるが、連続した面もある。の「習慣は国によって違うものだ」を一般論で述べる場合は本性・傾向を表し、「AはBだ」という構造をもつ通常の名詞述語文⁸⁾である。Aは総称的な名詞で、BはAの属性を表している。したがって、「国によって違う」は「もの」の規定語句になり、下のように図示できる。

(26) 習慣 は [国によって違う] もの だ。 A は B だ。

一般論ではなく、個別の体験からの実感として が発話されることがある。例えば、ほかの国の見慣れない習慣を見て驚いた時などには、一般論を再認識した驚きをもって を発話することになる。このような「ものだ」は文末の感慨を表す述語形式となり、 に近づく。これは次のような構造になる。

(27) 習慣は国によって違う もの だ。 AはB もの だ。

上では「国によって違う」が「もの」を規定しているのではなく、「習慣は国によって違う」という文全体に「ものだ」が驚きや感慨をつけ加えている。さらに、主題がなくなると になり、感嘆を表す一語文に近づく。

(28) (ずいぶん) 違う ものだ。

[B] ものだ

ただし、発話されるのは(28)だけでも、裏には「習慣は国によって」という主題を含む語句が存在していると考えられる。

また、の解説の用法を除き、他の「ものだ」文には共通した意味が存在するといわれる。揚妻(1990)は「もののだの修飾節がある特定の時間において一回的に生起するものではなく、恒常的、持続的な概念である点において共通している」、坪根(1994)は「『一般性』が何らかの形で関わっている」と述べている。上の例で言うと、「本性・傾向」の「ものだ」文は、個別的な特定の「習慣」ではなく、「習慣」というもの一般について、その性質を述べるものであり、「当為」の「ものだ」文は、特定の個人ではなく、人なら誰もがすべきことについて、述べるものである。また、「回想」の「ものだ」文は、一個人の回想ではあるが、一回性のことなく、持続的にくり返されることを述べるもので、時間軸上の一般性がある。「感慨」の「ものだ」文は、個別的なコトガラを見たときの感慨ではあるが、一般的な基準からみて普通でないことに対するあきれや驚きを表したものである。はおろかな行為をした人に対する「ばかなやつだ」という直接的個別的な驚きではない。「こんなばかなことをする人はいないはずだ」という一般的な認識に基づいて、それに反した目の前の現実に対する驚きを表している。このように、の全てに一般性が関与しているということができる。

一方、述語形式となった「ことだ」が文末に来る文(以下「ことだ」文とする)には二種類ある。高橋(2005)では、「スルコトダ」の用法として、取るべき方法をあらわす 感動的に回想・評価する(「形容詞+ことだ」も含む。)をあげ、以下のような例をあげている。

そうです。決してあきらめないことです。

なんというばかなことだ。

は「ものだ」文の「当為」と似ているが、「ことだ」文のほうは聞き手個人に対して個別的に忠告している点が、だれもがすべきであることを述べる「ものだ」文とは異なっている。も「ものだ」の「感慨」に似て

いる。しかし、「ものだ」の例文には一般的な認識が基にあり、それから外れたことに対する驚きが表されているが、の「ことだ」文は、目の前の現実に対して、個別的な評価を行うのみである。この点については、井島（1999）で、「ものだ」は（一般的）感慨（感心・あきれ）、「ことだ」は（個別的）感慨を表すと述べられている⁹⁾。

以上のような「ものだ」文と「ことだ」文の違いが、評価成分の「～もので」と「～ことに」の違いにも関与していると考えられる。

3.3 「～もので」の評価対象について

西川（2007）は、「～もので」の評価対象は、後続節の事象ではなく、「～もので」の潜在的に存在する主語であり、後続節の事象は「～もので」の根拠に当たるとしている。しかし、筆者は、「～もので」は主語に対する評価であると同時に、やはり後続節に対する評価でもある、という二重の評価性をもつと考える。西川（2007）では、次のような例とその置き換えの可、不可の結果から、評価対象をPであるとしている。

（29）「泥棒が、人のいるところへ入って来るというのも妙なものだ。」

（『女社長に乾杯！』, 288）（西川（25））

「??妙なもので、泥棒が、人のいるところへ入って来た。」

（30）そう思って見ると、急に親しみがわいてくるのだから、おかしなものだ。（『砂の女』, 342）（西川（28））

おかしなもので、そう思って見ると、急に親しみがわいてくるのだ。

（29）は、「泥棒が～入って来る」という事象が「～ものだ」の評価対象という文であるが、これは「～もので」という評価の構文に変換できない。一方、（30）は、「そう～くるのだ」が「おかしなものだ」の根拠になっていて、これは「～もので」という評価の構文に変換できる。したがって、後続節の事象は「～もので」の根拠であって評価対象ではなく、評価対象は「～もので」に潜在的に存在する主語の指し示すものごとである、とい

うのが西川（2007）の主張である。しかし、（29）のような事象は、3.1で述べた西川（2007）の説にもあるように、元来「～もので」の評価対象にならない、個別的で一回的な事象である。このような事象は「～のも（は）妙なものだ」という構文の主語として、「妙なものだ」の評価対象にはなっても、評価成分「妙なもので」の評価対象にはならないということではないだろうか。さらに、（30）からは次のような構造の文ができ、これは「～もので」という評価の構文に変換できる。

（30）' そうって見ると、急に親しみがわいてくるのは、おかしなものだ。

おかしなもので、そうって見ると、急に親しみがわいてくるのだ。

ここからは、「そう～わいてくる」という後続節の事象が「おかしなもの」の評価対象でもある、ということができる。したがって、（29）の変換が不可なのは、「人間／世の中（というものは）妙だ」の根拠になる事象しか「～もので」構文の後続節にならないという3.2.1の結論の言い換えにすぎず、（30）（30）' のような変換が可能なことから、後続節の事象は「～もので」の根拠でもあり、評価対象でもあるといえよう。

4．中止形としての「～もので」

述語名詞および形容詞の中止形の中には、評価成分と考えられるものが存在する。津留崎（2000，2001，2002，2003）では、後続節に対して表す関係の意味の点から述語名詞および形容詞の中止形を分類したが、「～もので」を「～ものだ」の中止形ととらえてみると、西川（2007）が評価成分の「～もので」としている例に2種類あることがわかる。本章では、「～もので」を中止形の表す関係の意味の中に位置づけたい。

4.1ではまず評価成分の「～もので」が関係する、注釈¹⁰⁾ 評価 という関係の意味を表す中止形について述べ、4.2において評価成分の「～もの

で」とされる例のうち、注釈 であるものを特定する。4.3においては 評価 を表す述語名詞および形容詞の中止形の例を概観し、4.4において、評価成分の「～もので」を含んだ 評価 という関係の意味について述べる。

4.1 中止形の表す 注釈 評価 という関係の意味について

関係の意味とは、先行節（の述語）が後続節に対してどのような意味を表すかをいう。評価成分とされる「～もので」が関係しているのは 注釈 評価 である。まず、形容詞の中止形の 注釈 の例をあげる。

（31）花子は生意気で、人の言うことにいちいち逆らう。

これは、花子の性格「生意気だ」を、後続節で述べられる「人の言うことにいちいち逆らう」という具体的行為より先に述べる文である。「生意気だ」という性格は後続節の叙述内容から導き出されたものであり、後続節に対する語り手の注釈である。「花子は生意気だ」という文が成り立つため、形容詞の中止形には述語性が残っており、一つの主語に述語が二つあるふたまた述語文となる。ただし、「生意気で」は、述語であると同時に叙述内容に対する語り手の注釈の機能も果しているため、「花子は生意気で、気が強い。」のような、二つの述語が対等で並列関係にある文の「生意気で」に比べて述語性は弱いといえる。（31）の後続節は動詞文で事実を叙述しているのに対し、先行節の「生意気で」は形容詞で評価の意味を持っている。このように、主観性、評価性において、先行節のほうが後続節に勝っていることが、注釈 という関係の意味を成り立たせている。並列関係の先行・後続節は主観性や評価性が同じなので、入れ換えても並列関係は変わらないが、先行節が 注釈 を表す文は、関係の意味が変わってしまう。

（31）花子は生意気で、人の言うことにいちいち逆らう。（再掲）

（31）' 花子は人の言うことにいちいち逆らって、生意気だ。

（32）花子は生意気で、気が強い。

（32）' 花子は気が強くて、生意気だ。

（31）の先行節は後続節に対して注釈しているが、（31）' の先行節は後

続節の根拠になっている。3.1において、「(P は) X もので Q 」における先行節「(P は) X もので」と後続節Qは並列関係ではないと述べた理由はここにある。先行・後続節を入れ換えた(15)'の先行節が後続節の根拠になっていることから、(15)の「困ったもので」は 注釈 を表すと考えられる。

(15) その男の性癖は困ったもので、壁があると落書きをし始める。

(再掲)

(15)' その男(の性癖)は、壁があると落書きをし始めて、困ったものだ。

次は、評価 を表す中止形の例である。

(33) さすが医者で、彼はすぐに花子の病名を言い当てた。

これは、「さすが医者だ!」という評価を表す文が先行節になっている。後続節の叙述内容から、「医者は病気とその症状に詳しい」などという一般的認識が導き出され、後続節に対する評価を表す節になったものであろう。「さすが医者だ」というのは「彼は」という主語に対応した述語ではなく一語文的で、述語性はないと考えられる¹¹⁾。ここでは、先行節の中止形は、後続節に対して評価を加える評価成分の機能を果している。

以上から、述語名詞の中止形は、先行節の述語として述語性がある場合はふたまた述語文になって 注釈 を表し、述語性がない場合は単文の中で語り手の態度を表す陳述成分となって 評価 を表すといえる。述語性の違いからくる文の構造の違いと中止形述語の評価の意味の強弱により、注釈 か 評価 かが決まる。ただし、中間的な例も存在する。

4.2 注釈 を表す「～もので」

・主語が総称名詞の場合

(34) 四十年前の田舎の海水浴場というのはまことにのんびりしたもので、葦簀張りの入れ込みの脱衣場と、黒いこうもり傘を立てたラムネやゆで玉子を売る小店が出ているだけであった。(父の)

後続節には具体的な「海水浴場」の様子が述べられている。「のんびりしたもので」はそこから抽出された海水浴場の特徴であり、後続節に対する注釈を表している。

(35) 外国語の聞き取りというのは、不思議なもので、こっちの耳と相性の良し悪しがあって、早口でもクリアーに聞き取れる人があれば、いくらゆっくり喋ってくれてもどうも良く分からない場合もある。(イギ)

(36) 人間というのは、おかしなもので、遠い遠い昔の出来事でも、あるちょっとした愚にもつかないことを鮮明に覚えている場合があります。(錦秋)

(35)は、「外国語の聞き取りというのは」という一つの主語に「不思議なもので」と「こっちの～(あって) 場合もある」という複数の述語がある。(36)も、やはり「人間というのは」という主語に、「おかしなもので」と「遠い～場合があります」という二つの述語がある。先行節の中止形述語は、後続節において述べられるくり返しの現象から語り手がものごとの性質を一言でまとめたもので、後続節に対する注釈を表すといえるだろう。

「不思議／おかしな」は評価成分の「もので」の前によくくる語ではあるが、常に 評価 を表すとは限らない。例えば、次の文の「不思議な人で」も 注釈 を表している。

(37) 花子は不思議な人で、どんなに悪態をついてもだれも悪くいう人はいない。

この例でも、「不思議な」は「花子」の上位概念である「人」の性質を表す規定語となって、後続句節の具体的な叙述内容に対する注釈を表している。同様に、(35)(36)の「もの」は、(35)は能力、(36)は存在のような意味を表す名詞で、述語形式の「ものだ」ではない。総称名詞が主語の場合は「もの」はその上位概念を表す名詞として、「総称名詞」は[～]もので(AはBで)」という構造になり、「～もので」全

体が述語名詞の中止形としてはたらいっている。そのため、「不思議な／おかしな」が使われていても「もので」のほうに語り手の主観性、評価性があまり感じられず、評価ではなく、注釈の解釈になると考えられる。

総称名詞が主語の例は、下のよう、形容詞の中止形には存在したが、述語名詞の中止形の例は収集できなかった。

- (38)これに対して、人は無力で、多くは勤め人になって隷従するか、商人になって媚を売るかである。(青の)

総称名詞主語の場合、形容詞では「人というのは無力だ／複雑だ／温かい」などと言えるのに対し、述語名詞では「人というのは無力な／複雑な／温かい人だ」とは言えないので、注釈を表す述語名詞の中止形は、「～もので」などに限られ、「人というのは無力な／複雑な／温かいものだ」という表現になる¹²⁾。このような「ものだ」は「もの」が存在のような意味をもつ名詞で、述語形式の「ものだ」ではないと考えられる。

・主語が特定名詞の場合

- (39) 耀子はこのごろ身装に凝るようになり、その趣味はいつぞやのサクラの衣装とちがって、一貫して清潔なもので、爪は染めず、化粧は自然を旨としていた。(青の)

- (40) 概して山本五十六という人は、上に悪く下によかったと言われているが、こういう面では奇癖があり、かつ、気さくなもので、新規開店の待合の軒灯用とマッチ用に、字を書いてやったこともあった。(山本)

- (41) そこへいくと小ツルなどはさっぱりしたもので、人のこともいうが、じぶんのことをいわれても、べつに気にとめないふうだった。(二十四)(西川の(12)と同例)

(39)～(41)はすべてふたまた述語文である。(39)は主語「その趣味は」に対し「清潔なもので」と「爪は～旨としていた」の複数の述語があり、後続節の具体的な叙述内容から導き出された特徴が「清潔なもので」である。「清潔な」は「もの」の規定語で、先行節は「ものだ」文ではなく、

名詞述語文である。これに対し、(40)(41)は、順に述語形式の「ものだ」に近づくように思われる。「気さくで」「さっぱりしていて」とは異なり、「もので」によって語り手の感慨が加わっている。さらに(41)は「など」というとりたて助辞による評価性も加わっていて、先行節が 評価 を表す中止形に近いものである。

4.3 評価 を表す述語名詞および形容詞の中止形

評価 を表す述語名詞および形容詞の中止形には、主語が現れる場合と現れない場合がある。

・主語がガ格の場合、モでマークされる場合

(42) さうしたら坊主が□のへらない男で、いや、日本はもともと貧乏だから、それだからこそ軍備に金をかけて戦争しなくちゃならない、攻撃は最大の防御、(略) なんて、妙な話をするんだよ。

(横し)

(43) 律子も案外で、笑うべきところでは他の二人と一緒に笑い声をあげていた。(岸边)

人の恒常的な性格を述べるときは、ふつう主語は「人は」の形になるが、ガ格主語で驚きや感慨を表す文がある。新屋(1994)は、「見聞した事態に驚いて思わず発したり、事態への感慨を表したりする場合」にガ格主語となる文があると述べ、「あの太郎がもう高校生ねえ、月日の経つのは早いものだ。」の例をあげている。主語がモでマークされる場合は、畠山(2001)が「お前も可哀そうな男だ」の例をあげ、「すでに充分な予備知識を持っている対象に、(命題)Pにより表現される予想もできなかった性質が帰属するということを発見、もしくは再発見したことに起因する意外性」を表すと述べている。いわゆる「詠嘆のモ」といわれる用法である。(42)(43)の述語名詞や形容詞の中止形には述語性があるが、「～は」という形で主語の性格を述べる場合に比べて、語り手の主観が加わっている。ふたまた述語文で、中止形に述語性が残るこれらの例は、注釈 との中間的な例とい

える。前節であげた「～もので」の(41)も、これと同列の例と考える。

・主語がない場合

「規定語 + 名詞で」の場合

(44)「このあいだ、にせ刑事がやってきたのですよ。まぬけなやつ
で、手帳を落としていった。…」(気ま)

(44)には主語がないが、文脈から「にせ刑事」とわかる。しかし、「にせ刑事はまぬけな奴で」というよりも評価性が感じられる。これは、次のような独立した主語のない名詞述語文¹³⁾の例と同様に考えられるだろう。

(45)「あきれたやつだ。最後までコーチの指示を無視しおって」(ホツ)

「あきれたやつだ」は、後続文の事態から導き出された話し手の眼前の人に対する評価を表す文である。規定語が述語、それを受ける名詞が主語という意味関係にある点で山田(1922)が「感動喚体の句」とする文に近い。「やつにはあきれた」と「最後までコーチの指示を無視して、あきれた」という両方の気持ちを表すとき、主語をおかずに規定語とそれを受ける「やつ」のような評価を含んだ名詞による文で表すのだろう。これが中止形となっているのが(44)で、主語を復元できる点でふたまた述語文に近いが、主語がないことによる評価性が加わっている。

陳述副詞を伴う場合

(46) 流石に玄人で、打つべき手は全部、打ってあった。(御宿)

(47)「“こすのと”だすか」とさすがに芸者の端くれで地唄の一つ二つは聞き齧っていた。(女運)

(48) …、特に悪戯をするわけではないが、そこは男の子で、少しもじっとしていない。(御宿)

(49) タクシーは、やっとスムーズに走り始めた。そこはプロの腕で、かなり混み合った道を、一気にスピードを上げて、他の車の間を縫って走って行った。(かけ)

「さすが(に)」は、工藤(1997)において、陳述副詞の中の因果性の叙法副詞と評価副詞の境界例とされるが、ここでは述語名詞の中止形が 評

価を表す一形式と捉えておく。「玄人」や「芸者（の端くれ）」という人の特徴から一般的に考えられる能力が現実が発揮された時の表現で、先行節は後続節の具体的、個別的な叙述内容から導き出された評価である。「そこは」は陳述副詞ではないが、(48)(49)では「やはり」と同じような意味を表している。これらの例は、語り手が後続節の特定の人の行為から「玄人」「芸者の端くれ」「男の子」「プロ」という上位概念とその一般的な性質を導き出し、特定の人がある上位概念の一般的な性質をもつことを再認識して、感慨や驚きをもって行為に先立って述べたものである。

「AのBさで」の形をとる場合

(50) おまけに、「さあ、いってらっしゃい」といわれたところで、
サラリーマンの娘の悲しさで、生れて二十年ただの一度も人に物を
売ったことがないのである。(父の)

(51) いまの隣人は、アメリカ人の家族である。マンション暮らしの
かなしさで、会釈程度のつきあいだから、...。(父の)

(52) 宿屋の番頭の悲しさで、長年肌身はなさなかつた十手も、今は
ない。(御宿)

この、「AのBさ」も、山田(1922)があげた「感動喚体の句」の一類型である。Bは形容詞からの派生名詞で、意味的にはAが主語、Bが述語となっている。収集した 評価 を表す「AのBさで」の用例は、すべてAが総称名詞、Bが感情形容詞「悲しい」であった。「サラリーマンの娘」「マンション暮らし」「宿屋の番頭」は語り手や登場人物など特定の個人の属性だが、「AのBさで」は個人について述べた表現ではない。後続節の具体的な叙述内容から「(個人の上位概念) Aは悲しい」が導かれ、「Aの悲しさで」という感慨を具体的な行為に先立って述べるもので、先行・後続節の意味構造は と同様である。収集した用例には「悲しさ」しかなかったが、「宮仕えのつらさで」など、感情形容詞からの派生名詞の例が考えられるだろう¹⁴⁾。

先行節に主語がない場合、評価 を表す述語名詞の中止形には述語性が

ないので、構文的には単文である。中止形述語を含む句は単文中の評価成分となっている。

4.4 評価 を表す「～もので」

・主語が顕在する場合

主語が顕在する場合、評価 を表す「～もので」の主語は全て総称名詞である。後続節の個別的な叙述内容から、総称名詞で表されるその上位概念の性質を先に述べ、後続節に対する 評価 を表すという構造になる。

(53) 気の持ちよう、というのは 不思議なもので、ここではとても堪えられぬと思っても、綾子の「面白い、面白い」に励まされると、土下座させられていたような気分も徐に引起される。(權)

(54) 考えれば年月の流れとは 早いもので、この暮しも繰ってみればもう足掛け八年もの時が積み重なっている。(權)

これらは先行節に「気の持ちよう、というのは」「年月の流れとは」という主語があり、後続節の主語は異なっているので、ふたまた述語文ではなく重文構造である。後続節の叙述内容は特定の人についての個別の出来事で、そこから先行節の主語である総称名詞で表される上位概念に対する「不思議だ」「早い」という語り手の評価が導き出され、先に述べられている。

(55) 私は仕方がないから一所に玄関にかかりましたが、心のうちではきっと断られるに違いないと思っていました。ところが坊さんというものは 案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私達を通して、すぐ会ってくれました。(破戒)

(56) 風間敬之進は、時世の為(ため)に置去(おきざり)にされた、老朽な小学教員の一人。(略)黒木綿の紋付羽織、垢染みた着物、粗末な小倉の袴を着けて、競々郡視学の前に進んだ。下り坂の人は 気の弱いもので、すこし郡視学に冷酷な態度が顕れると、もう妙に固くなって思うことを言いかねる。(破戒)(西川の(11)と同例)

(55)(56)ともに、後続節には主語が現れていないが、後続節において述べられているのは、「私」の目の前にいるお坊さんや「風間敬之進」という特定の人の行為や心理である。先行節の主語は「坊さんというもの」「下り坂の人」という総称名詞で、後続節の主語に当たる特定の人の上位概念なので、両方とも重文構造の文となる。

(53)～(56)のような先行節は、「ものだ」文の分類の中に位置づけられる。3.2.3で、「A」は「[B]もの」だ」という一般論としての本性・傾向を述べる文から、「[B]ものだ」という、主語のない感慨を表す文までの連続の過程をみたが、その中に個別の体験から一般論を再認識した驚きをもって発話される文（「AはB」ものだ）があった。(53)～(56)の先行節は、まさにその「AはB」ものの構造をもつ「ものだ」文に当たるといえる。つまり、後続節で述べられている具体的、個別的なコトガラから、その上位概念についての本質に思い当たり、感慨をもってそれを先に述べる文である。

さらに、意味的には、上位概念である総称名詞の評価を先に述べるといって、先行節が「AのBさで」という形をとる中止形の例との共通性もある。つまり(51)は次のように言い換えられる。

(51)' マンション暮らしは 悲しいもので、会釈程度のつきあいだから...

このような例は、「もので」の前が評価を表す形容詞である必要はない。次のような動詞の場合も同様に先行節は「評価」を表している。

(57) ところが世の中には 変な国があるもので、キューバには四の単位のお札がある。(単位)

(58) 人間万事塞翁が馬とは よく言ったもので、すぐくついていると思ったことが、のちのついてないことへの伏線だったりする。
(サイ)

先行節全体が後続節に対する「評価」を表す文の先行節は、「評価節」とも呼べるものである。

・主語が顕在しない場合

(59) 変なもので、教えられればうるさいと思うくせに、教えてくれないければちょっと癪に障る。(父)

(60) 今日は久々に澄みきった青空が、この大学都市の上にひろがっている。現金なもので、このところずっと続いていた頭の重さも急に晴れたようだ。(木霊)

西川(2007)は、主語のない「～もので」も、主語に総称的な名詞が想定できる場合は、省略されていると考えられ、重文構造であると述べている。重文構造とすれば、(59)(60)の「～もので」も「評価節」に含まれることになる。ただし、主語が顕在する典型的な重文とは異なる。「AのBさで」なども意味上の主語をもつが、構文的には単文である。

ここで、3.3でみた西川(2007)の、「～もので」の評価は後続節に対するものではなく、省略された総称的な名詞に対するものだという説について、再び考えたい。これらの裏に「世の中/人間とは」のような主語が潜在するとしても、中止形「～もので」は後続節に対する評価でもある。(59)は先行・後続節を入れ換えた次のような言い換えができる。

(59)' 教えられればうるさいと思うくせに、教えてくれないければちょっと癪に障って、変なものだ。

(59)" 教えられればうるさいと思うくせに、教えてくれないければちょっと癪に障るのは、変なものだ。

これは、評価を表す「～もので」も、2.1において述べた、評価成分の評価が後続節を対象としているという特徴をもっているからである。主語と同時に後続節に対する評価を表すという二重性をもつのが評価を表す「～もので」であり、評価成分の「～もので」でもあると考える。

総称名詞で表される上位概念についての一般的な評価を先に、特定名詞の個別的な事態を後から述べるという先行・後続節の意味構造は、評価を表す中止形の一類型である。総称名詞についての一般的な評価を表すという特徴をもつ評価成分の「～もので」は、主語の有無によらず、評価を

表す中止形の中で、大きな位置を占めている。

5．まとめと課題

本稿では、まず西川（2007）の節を検証した。「～もので」が節構造を取り、話者の個別な評価ではなく、一般的な評価であることを示すという点、後続節の叙述内容は「～もので」の評価の根拠に当たる、という点については認めたが、「～もので」が後続の節と並列関係にあるという点、「～もので」の評価対象が後続節の叙述内容ではなく、主語にあたるものごとであるという点については、それぞれに反論を提示した。

次に、評価成分とみなされていた「～もので」を、中止形の表す関係的意味という観点からとらえ直し、**注釈 評価** という別種の機能をもつものに分類されることを示した。

注釈 評価 を表す中止形の概略を示せば、＜表1＞のようになる。中止形が **注釈** を表す文は、典型的にはふたまた述語文中で中止形は先行述語であり、**評価** を表す文は、典型的には単文で、中止形が文中で評価成分となる。中間的な例として、主語がガ格やモでマークされる **評価** の文があり、述語形式「ものだ」の中止形にもそこに位置づけられる例がある。また、先行節の主語が総称名詞、後続節の主語が特定名詞という重文では、先行節全体が後続節に対する評価を表す「**評価節**」となる。**評価** を表す中止形には、総称名詞に関する一般的な知識に基づいた評価を表すという一類型があり、一般的な評価を表すという特徴をもつ評価成分の「～もので」も、その一翼を担っている。

- 1: ふたまた述語文と単文の両方の要素あり。
- 2: 顕在しないが主語は「人間／世の中(というもの)」になる。単文と重文の両方の要素あり。

今後は、注釈 評価 以外の関係の意味を表す「～もので」についても考えていきたい。

- 1) 本稿の評価成分にあたるものを、渡辺(1949)では陳述副詞の一部「批評」とし、「ことに」「もので」に言及している。渡辺(1971)でも「批評の誘導形」として「ことに」の例があがっている。
- 2) 「重文」には主従関係の二つの節で成り立つ「複文」と対立する、二つの節が対等の関係で成り立つ文という意味もあるが、西川(1997)では、「重文(構造)」という語を、「主語と述語を備えた二つの節で成り立つ文(構造)」という意味で使っているようである。本稿でも西川(2007)と同様の意味で用いることとする。
- 3) 西川(2007)は、「ものだ」と「ことだ」の違いを述べる根拠として、森田良行・松本正恵(1989)『日本語表現文型』(NAFL選書5)アルクを引用している。
- 4) (19)～(22)について、筆者は簡単なアンケート調査を行った。対象は首都

- 圏の日本語母語話者の10代、20代の女子大学生。(19)と(20)、(21)と(22)を比べ、A(19)(21)のほうが自然、B(20)(22)のほうが自然、C両方とも自然、D両方とも不自然のどれかを問うたところ、有効回答数47のうち、(19)と(20)では、A0、B42、C3、D2、(21)と(22)では、A6、B25、C16、D0という結果であった。
- 5) 西川(2004)では、主に構文論的な観点から評価的文副詞になり得る形容詞を4種に分類してあるが、分類された語は、本稿の意味的な分類とほぼ重なる。異なる点は、Aaの禍福評価とAdの分析的評価が同種とされていることである。「～もので」の特徴を述べるに当たって、「禍福評価」を分ける必要があると考え、本稿では別分類とした。
- 6) 「～もので」については、小説、エッセイ等を含む17冊54作品を対象として全用例を収集し、それ以外の19作品からも用例を得た。また、『CD-ROM版新潮文庫の100冊』のうち、翻訳作品を除いた67作品から「～もので」、「～ことに、」の形をとる例を収集した。西川(2007)は『CD-ROM版新潮文庫の100冊』全作品を対象に用例を収集しているが、西川と筆者とでは評価成分の認定や語句の単位がわずかに異なるため、あげられた語例にも差異がある。
- 7) 文末形式の「ものだ」については、寺村(1984)が「ものだ」の助動詞の用法を分類して以来(寺村は と を合わせて本質規定・当為とし、4種に分類した)、ほぼこの分類に基づいて「ものだ」についての議論が進められている。分類の用語は、井島(1999)にしたがった。高橋(2005)、尾方(2000)などでは、「ものだ」の前のテンス形式によって「ものだ」の用法をさらに細かく分けている。
- 8) 「ものだ」文を文末に述語形式の「ものだ」がくる文としたが、名詞述語文との連続性もある。ここでは本性・傾向の「ものだ」文に名詞述語文を含めて述べた。
- 9) 井島(1999)P. 86の表による、さらに、モノダ文とコトダ文の違いについて、モノダは普遍性・汎称性・一般性を担い、コトダは一回性・特称性・特殊性を担うとも述べている。
- 10) 「注釈(註釋)」という用語は、渡辺(1971)では、「さいわい」など、本稿の評価成分の一部も含んでいるが、津留崎(2002, 2003)および本稿の「注釈」は、述語名詞の中止形が後続節に対して表す関係の意味の一類型で、異なる概念である。ちなみに、津留崎(2000, 2001)では、抽象 という用語を使ったが、後に「注釈」に改めた。同じものを指している。
- 11) 主語のない一語文の「名詞+だ」は、述語ではないので述語名詞ではなく、述語性はもともとない。しかし、ここではこのような文の「名詞+で」も「述語名詞の中止形」とよび、述語名詞の中止形に含めておくこととする。
- 12) 述語名詞の場合「類としての性格は、主体より大きいカテゴリーを表す語を修飾する『ヒトは～もので』という形によって表される。」からだと津留崎(2002)で述べた。ただし、「人間とは悲しい動物だ」のような表現はあると思われる。
- 13) 新屋(2007)では、このような名詞述語文を無主語名詞文と呼んでいる。

- 14) 津留崎 (2002) には感情形容詞でない形容詞が使われる「女親の甘さで」という例もあげたが、これは 評価 ではなく 解説 という関係の意味を表すと現在では考えている。

参考文献

- 井島正博 (1999) 「形式名詞述語文の多層的研究」『成蹊大学一般研究報告130』成蹊大学文学部
- 尾方理恵 (2000) 「『ものだ』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集26』東京外国語大学
- 工藤浩 (1997) 「評価成分をめぐる」『日本語文法 - 体系と方法 - 』ひつじ書房
- 工藤浩 (2004) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 新屋映子 (1994) 「意味構造から見た平叙文分類の試み」『日本語学科年報15』東京外国語大学
- 新屋映子 (2007) 「随筆の名詞述語文」『ひつじ研究叢書言語編第51巻 日本語随筆テキストの諸相』ひつじ書房
- 高橋太郎ほか (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
- 坪根由香里 (1994) 「『ものだ』に関する一考察」『日本語教育84』
- 津留崎由紀子 (2000) 「名詞述語の中止形デの機能」『人間文化論叢2』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 津留崎由紀子 (2001) 「ナ形容詞のデ中止形の機能」『人間文化論叢3』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 津留崎由紀子 (2002) 『名詞述語および形容詞の中止形の表す関係の意味についての研究』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文 (未公開)
- 津留崎由紀子 (2003) 「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学13』国立国語研究所
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 西川真理子 (2004) 「日本語の評価的文副詞になり得る形容詞」『甲子園大学紀要栄学部編 No. 32 (A)』
- 西川真理子 (2007) 「評価表現『Xもので』」『表現研究86号』表現学会
- 畠山真一 (2001) 「いわゆる詠嘆・含蓄の『も』について」『日本語科学9』国立国語研究所
- 山田孝雄 (1922) 『日本文法講義』寶文館 (宝文館復刻版 (1971))
- 渡辺実 (1949) 「陳述副詞の機能」『国語国文18-1』京都大学
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房

用例出典 (本稿に引用した用例のみ。() 内は本文中の出典の表記を示す。)

(野菊)「野菊の墓」伊藤左千夫 (錦秋)「錦秋」宮本輝 (山本)「山本五十六」阿川弘之 (二十四)「二十四の瞳」坪井栄 (破戒)「破戒」島崎藤村

評価成分「～もので」をめぐって

以上『新潮文庫の100冊CD-ROM版』

- 『(思い出)トランプ』向田邦子 新潮文庫
『(哀歌)は流れる』高木のぶ子 新潮文庫
『(父の)詫び状』向田邦子 文春文庫
『(イギ)リスは愉快だ』林望 文春文庫
『(青の)時代』三島由紀夫 新潮文庫
『(横し)ぐれ』丸谷オー 講談社文芸文庫
『(岸边)のアルバム』山田太一 角川文庫
『(気ま)ぐれ指数』星新一 新潮文庫
『(ホッ)トコーナー』『ダイヤモンドの四季』赤瀬川隼 新潮文庫
『(御宿)かわせみ』平岩弓枝 文春文庫
『(女運)長久』『感傷旅行』田辺聖子 角川文庫
『(かけ)ぬける愛』赤川次郎 角川文庫
『(權)』宮尾登美子 新潮文庫
『(単位)物語』清水義範 講談社文庫
『(サイ)モン・セッズ』柴門ふみ 新潮文庫
『(父)・こんなこと』幸田文 新潮文庫
『(木霊)』北杜夫 新潮文庫